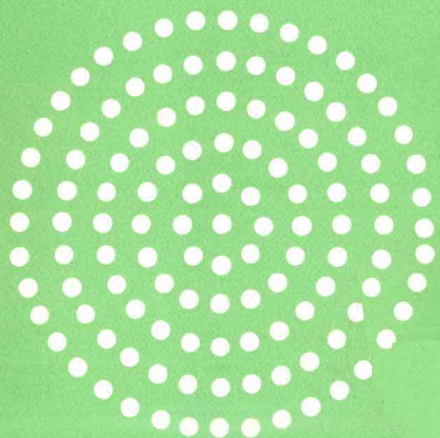


日本の詩集 3

北原白秋詩集





昭和四十三年十一月十日 初版発行
昭和四十九年五月三十日 七版発行

著者 きた はら 北原白秋 はく しゅう

発行者 角川源義

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
郵便東京一九五二〇八〇一〇二三
電話東京(三三)七二二(大代表)

日本の詩集 3

北原白秋詩集

印刷カラー 暁美術印刷株式会社

本文 文暁印刷株式会社

函・扉 暁美術印刷株式会社

製函 川合紙器加工所

製本 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0392-571903-0946(2)

目次



詩集 邪宗門

邪宗門扉銘
邪宗門秘曲
室内庭園
赤き僧正
WHISKY
濃霧
赤き花の魔睡
空に真赤な
接吻の時
濁江の空
謀叛
こほろぎ
ほのかにひとつ
冷めがたの印象
噴水の印象
悪の窓 断篇七種
鉛の室
角を吹け
ほのかなる蠟の火に

〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

詩集 思ひ出

鷗を抜けよ
ただ秘めよ
鴿
青き花
君
夕
解纜
なわすれぐさ
よひやみ
わが生ひたち
序詩
金の入日に嚮子の黒
骨牌の女王の手に持てる花
黒い小猫
みなし児
秋の日
断章抄
穀倉のほめき
初恋

二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

詩集 烟の祭

新月

雨中小景

海雀

詩集 真珠抄

真珠抄 短唱

永日礼讃

月光礼讃

巡礼

煙

詩集 白金ノ独楽

白金ノ独楽

日光四章抄

薔薇二曲

野晒

吉日

詩集 水墨集

雪煙

竹林の七賢

老子

千利休

雪中思慕

初秋の朝飯

月光微韻

かやの実

落葉松

野茨に鳩

詩集 海豹と雲

水上

早春

白鷺

雪と狩獵者

鵲

曇り日のオホーツク海

竹林幽居

月夜孟宗の図

三三

こさめひたき

三三

白蛾

三三

月に寄せて

三三

胡蝶

三三

蓍童

三三

詩集 新頌

帰去来

三三

水の上

三三

解説

評伝

藪田義雄 三三

鑑賞

吉田精一 三三

詩の旅

大竹新助 三三

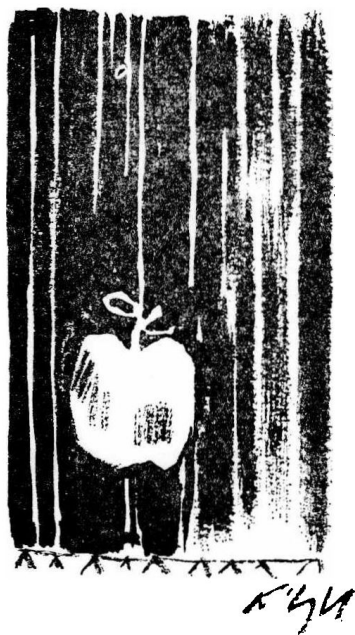
年譜

三三

写真協力

大神達夫 小林文司 柴田勇治 多々良栄次 長野重一
前田真三 緑川洋一 三宅修 矢萩和巳

北原白秋詩集



詩集
邪宗門



邪宗門扉銘^{ひめい}

ここ過ぎて曲節^{マロデフ}の悩みのむれに、
ここ過ぎて官能の愉樂^{ゆらく}のそのに、
ここ過ぎて神経^{きしゆ}のにがき魔睡^{ますみ}に、

詩の生命は暗示にして単なる事象の説明には非ず。かの筆にも言語にも言ひ尽し難き情趣の限なき振動のうちに幽かなる心靈の歎歎^{ききよ}をたづね、縹渺^{へうべう}たる音楽の愉樂に憧がれて自己観想の悲哀に誇る、これわが象徴の本旨に非ずや。されば我らは神秘を尚び、夢幻を歎び、そが腐爛^{ふらん}したる頽唐^{たいたう}の紅を慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寐にも忘れ難きは青白き月光のもとに歎歎^{すうりな}く大理石の嗟嘆^{なり}也。暗紅にうち濁りたる埃及^{エヂプト}の濃霧に苦しめるスフィンクスの腫也。あるはまた落日のなかに笑へるロマンチツシユの音楽と幼児磔殺^{たくさつ}の前後に起る心状の悲しき叫也。かの黄蠟の腐れたる絶間なき瘞癰^{けいれん}と、ギオロンの三の絃を擦る嗅覚と、曇硝子にうち噎^{むせ}ぶウキスキイの鋭き神経と、人間の脳髓の色したる毒艸^{どくさう}の句深きためいきと、官能の魔睡の中に疲れ歌ふ鶯^{うぐひす}の哀愁もさることながら、仄かなる角笛の音に逃れ入る緋の天鷲絨^{びろうど}の手触の棄て難さよ。

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、

色赤きびいどろを、句鋭きあんじやべいいる、
南蛮の棧留縞を、はた、阿刺吉、珍酩の酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖礫、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
波羅韋僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、
ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火点るといふ。
かの美しき越歴機^{えれき}の夢は天鵝絨^{びろうど}の薰^{かぐり}にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獸^{とらけもの}映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧けはひの料しよは毒草どくさうの花よりしぼり、
腐れたる石の油に画まくてふ麻利まり耶やの像よ、
はた、羅甸らてん、波爾杜瓦爾ぼるとがるらの横つづり青なる仮名かなは
美しき、さいへ悲しき歡樂わの音にかも満みつる。

いざさらばわれらに賜たまへ、幻惑ぼくの伴天連尊れんそんじや者、
百年もとせを刹那せつなに縮め、血はの磔背はりきせにし死すとも
惜おしからじ、願ねがふは極秘ごくひ、かの奇くしき紅の夢、
善主ぜんす鷹たか、今日を析たに身も靈たまも薫くゆりこがるる。

室内庭園

晩春おそはるの室むろの内、

暮ふれなやみ、暮ふれなやみ、噴水ふきあげの水はしたたる……

そのもとにあまりす赤くほのめき、

やはらかにちらほへるヘリオトロップ。

わかき日のなまめきのそのほめき、静しづころなし。

尽つきせざる噴水よ……

黄なる実うの熟うるる草、奇異かういの香木、

その空にはるかなる硝子がらすの青み、

外光ぐわいこうのそのなごり、鳴ける鶯、

わかき日の薄暮くれがたのそのしらべ、静ころなし。

いま、黒き天鵝絨の

にほひ、ゆめ、その感触……噴水に縫れたゆたひ、

うち湿る革の函、饅ゆる褐色、

その空に暮れもかかる空気の吐息……

わかき日のその夢の香の腐蝕、静ころなし。

三層の隅か、さは

腐れたる黄金の縁の中、自鳴鐘の刻み……

ものなべて悩ましき、盲ひし少女の

あたたかに匂ふかき感覚のゆめ、

わかき日のその露に音は響く、静ころなし。

晩春の室内、

暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりす赤くほのめき、

甘く、また、ちらほひぬ、ヘリオトロオプ。

わかき日は暮るれども夢はなほ静ころなし。